

早稲田大学政治学研究科

博士学位申請論文審査報告

博士学位申請者 曲 揚

論文題目 「日中戦争期の華北日本占領区における宣伝と文学」

論文書式 A4 横書き (40 字×36 行)、目次 4 頁、本文・脚注 162 頁、
付録表・文献 16 頁

受理決定日 2023 年 1 月 10 日

審査委員

主査 土屋礼子 早稲田大学政治経済学術院教授 (歴史社会学)
副査 平林宣和 早稲田大学政治経済学術院教授 (中国文学)
副査 宗像和重 早稲田大学文学学術院教授 (日本文学)
副査 李 相哲 龍谷大学社会学部教授 (社会学)

最終口頭試問実施日 2023 年 2 月 1 日 (14:00～16:00)

Zoom ミーティングによるオンライン面談

1. 論文の構成

本論文は、序論および第一章から第七章までで構成されている。

目次

序論

- 第1節 問題の所在
- 第2節 先行研究の考察
- 第3節 研究目的と研究意義
- 第4節 仮説と研究方法
- 第5節 使用する史料
- 第6節 論文の構成

第一章 華北占領区における宣伝と文学の概況

- 第1節 華北占領区における日本の統治と宣伝工作の概況
- 第2節 盧溝橋事件前後の華北における新聞と言論環境
- 第3節 日中戦争期の華北における文学状況の変化

第二章 宣伝体制の確立と「新文学」の模索

- 第1節 日本軍と協力政権による宣伝工作の整備
- 第2節 同盟通信社と日本電報通信社の活動
- 第3節 定期刊行物における言論操作
- 第4節 文学への指導と文学界の状況
- 第5節 小括

第三章 華北占領区 of 思想戦

- 第1節 日本と華北政務委員会の宣伝方針の変化
- 第2節 定期刊行物に見る宣伝工作
- 第3節 文学への指導と文学界の状況
- 第4節 小括

第四章 「大東亜聖戦」のための宣伝工作

- 第1節 太平洋戦争勃発に応じた占領区宣伝体制の変化
- 第2節 定期刊行物に見る宣伝工作
- 第3節 文学への指導と文学界の状況
- 第4節 小括

第五章 文化戦と文学報国——精神を武器に

- 第1節 戦局悪化に即した新聞統制と文化宣伝の強化
- 第2節 定期刊行物から見る宣伝
- 第3節 破綻しつつある文学指導

第4節 小括

第六章 宣伝と文学——戦争のはざまに生きる中国作家の創作

第1節 占領区における東亜文学の創造

第2節 「私的世界」となる散文と詩歌

第3節 通俗小説：「桃源郷」のような存在

第4節 明確な宣伝目的を持つプロパガンダ小説

第5節 漂泊する者の藻掻きと「故郷」に停滞する者の軋轢

第6節 小括 華北占領区における宣伝と文学の葛藤

第七章 結論

第1節 華北日本占領区における宣伝工作と文学指導の変化

第2節 華北占領区における宣伝工作の特徴

第3節 華北占領区における文学指導と文学創作の葛藤

第4節 文学テキストに滲み出た占領区の実情

第5節 華北占領区における宣伝と文学の二面的性格

第6節 華北占領区における宣伝と文学——感性を武器に

第7節 今後の課題

付録表一覧

初出

参考文献

2. 論文の概要

本論文は、序論および七つの章から構成されている。

序論では、先行研究の整理を踏まえ、日中戦争期の華北占領区における宣伝と文学を考察するため、宣伝体制、文学指導、文学創作と宣伝工作の効果をめぐる四つの仮説を示し、それらを検証するために、時系列による整理と文学テキストの分析を行う実証的研究方法を説明した。

第一章では、日中戦争前の華北における新聞出版の環境、新聞出版業と通信社網の発展状況、国民党政府時代の新聞管理体制、中国の近代化における文学・新聞・宣伝の関係性を整理し、戦前から戦中までの、華北の新聞管理体制、文学と宣伝の一体化における連続性を示した。

第二章では、1937年盧溝橋事件直後から1940年汪精衛国民政府が成立するまで、華北占領区における宣伝工作と文学指導の状況を考察した。この時期の宣伝工作は宣伝体制の確立と「新文学」の模索を中心に実施され、日本軍が主体となる全面的指導の下、臨時政府情報処が情報宣伝指導を担当し、各地警察局や新聞事業管理所が新聞を管理した。また、同盟通信社北支総局が通信社の統括を行い、ラジオや映画などのメディアもそれぞれの専門協会で管理するという分野別の宣伝体制が確立された。

日本軍によって買収された中国語機関紙『庸報』による、この時期の文学への指導は、華北占領区の統治を安定させるため、文化思想の再建が図られ、共産主義や新文化運動に対抗する新文学の概念の模索も行われたが、結局、中国伝統文化と儒学を中核とする「東方新文学」に帰着した。それと対照的に、華北文壇の機関誌『中国文芸』では、「文化救国」・文学の独立を確保しようとしていたが、実際に掲載された内容は、研究紹介類が圧倒的に多く、小説や詩歌などの文学創作はほぼ見られなかった。

第三章では、汪精衛国民政府の成立から太平洋戦争勃発まで、華北占領区で行われた思想戦をめぐる宣伝工作を論じた。宣伝体制が確立された華北占領区での宣伝工作は、思想戦の展開と中国側の自主性の発揮を中心に進められ、新民会と協力政権の情報部門が強化された。華北政務委員会から地方行政機関まで情報部門が設置され、中国側の要人が宣伝の陣頭に立ち、日本軍が内面指導に回った。当局は文学を「新たな文化建設」の必要手段と看做し、反日作品以外に対する制限をある程度緩めた。そのため、新人作家と文学青年が活躍し始め、娯楽的通俗小説が人気を得て、官能的描写を特徴とする「色情文学」も流行るようになった。『庸報』は1940年を「文芸復興」の年と指定し、東亜新秩序建設の重点として平和文学に力を入れたが、その文学綱領は具体性がなく、抽象的なスローガンに止まっていた。

第四章では、太平洋戦争勃発から1944年5月の華北新聞新体制の確立までの宣伝工作を検討した。太平洋戦争勃発後、日本軍は戦争を中国側の「自衛」と強調し、華北政務委員会が指導の主体として、各省市公署に宣伝処を設置した。また、華北政務委員会情報局と華北宣伝連盟の指導の下、情報・報道・宣伝工作が一体となり展開されるようになった。消極的な言論弾圧から積極的な言論誘導へと転換し、精神動員・文化動員も重視され、文学に対して、指導的・教化的役割を重視し、戦争動員への協力を要求するようになった。『庸報』ではこれに応じて文学欄以外の頁では、プロパガンダ小説の掲載が始まった。それに対して、『中国文芸』では「色情文学」や「郷土文学」論争の議論が目立ち、周作人などの有名作家が消極的な対応を見せた。

第五章では、1944年5月、華北占領区における新聞新体制の確立から終戦までの宣伝工作を検討した。華北占領区内の全新聞を統合した国策新聞『華北新報』の創刊による新聞新体制の下、華北における新聞と言論管理が一元化された。この時期の宣伝工作の特徴は、中国語新聞『華北新報』と日本語新聞『東亜新報』の一言語一紙に代表されるように、宣伝体制の徹底的な一元化統合である。文化宣伝による精神動員が宣伝工作の中心となり、それまでの情報・宣伝・報道の一元化体制に文化工作も加わり、華北政務委員会情報局による強化指導の下で華北全域の文化宣伝体制が統一された。日本とその協力政権は文化戦や文学報国を打ち出し、物質文明ではなく、東方精神などの精神文明をもって英米と対抗しようとし、文化や文学により人の感情に訴える宣伝に転換し、「文学報国」や国民文学などの国策文学を打ち出した。華北占領区の新進作家の態度には、戦争動員を推進する積極派と、純文学を維持する対抗派の分断が見られた一方、周作人を代表とする既成作家たちが宣伝の表舞台に立つようになった。

第六章では、本論文の分析対象となる新聞雑誌から、文学テキストを抽出し、日本文学作品の紹介と翻訳、純文学の創作、連載小説、プロパガンダ小説に分け、それぞれ華北占領区で行われた言論統制政策と文学の置かれた状況に基づき、その変化と特徴を検討した。宣伝の道具である新聞雑誌に掲載された文学作品には、当局の文学指導を忠実に反映したプロパガンダ小説と同時に、戦意高揚を図る新聞全体の雰囲気とは対照的な消極的かつ抑制的な純文学の創作、占領区読者に社会現実から掛け離れた一種の「桃源郷」を提供した娯楽的通俗小説が存在したことを明らかにし、華北占領区における宣伝と文学は、協力と抵抗の二項対立では捉えきれない複雑な関係を呈したことを示した。

第七章では、分析結果を整理しながら、序論で提出した仮説を検証し、日中戦争期の華北占領区における宣伝工作の特徴をまとめ、占領区における宣伝、文学と政治の関係を考察した。

3. 論文の評価

本論文は、日中戦争期の中国大陸における日本の宣伝政策および言論統制とその実態について、上海や満洲などと較べてこれまでほとんど解明の進んでいなかった、華北占領区という日本軍の支配地域における宣伝と言論統制の政策、またそれに対応した現地の中国語新聞や中国作家達の活動を、中国語の新聞雑誌を中心として実証的な資料の裏付けを以て明らかにし、上海とも満洲とも異なる宣伝政策とそれに対応した文学の内実について、新たな知見を提示したものである。本論文の意義は、以下の三点にまとめられる。

第一の意義は、日本支配下の華北占領区における言論統制及び宣伝活動を明らかにするために不可欠な一次資料として、華北占領区の宣撫組織である新民会による新聞調査の報告書や華北新聞協会の規約と名簿、華北占領区の中央政府華北政務委員会による宣伝指導要綱、北京新聞協会の機関誌や華北宣伝聯盟の機関誌『華北宣伝報』など、貴重な基本的資料を発掘したことである。それらの資料を更に、華北占領区の代表的な中国語機関紙である『庸報』および『華北新報』を読み込んでこれと照らし合わせることで、その位置づけと意味を明らかにし、華北占領区における日本側の宣伝工作の基本的な枠組みとその変化を時系列に沿って、ほとんど初めてくつきりと描き出した。

第二の意義は、宣伝工作の一環としての文学、あるいは宣伝政策に対する抵抗も含めた対応としての文学の活動を、中国語の新聞雑誌の中から具体的に摘出し読み取り、中国大陸における宣伝とその指導の下にあった文学の関係に切り込んだことである。すでに日本文学の研究では、戦時中のプロパガンダと作家及び文学作品の関係が論じられてきているが、中国語の文学と日本側の宣伝工作との関係は、「漢奸」として非難されてきた中国側協力者を中心的な対象として含むため、中国での研究はあまり進展していない分野である。申請者は、華北文壇の代表的な中国語文学雑誌『中国文芸』や『中国文学』の中に見られる、有名な作家や代表的な作品のみならず、支那方面軍機関紙となった『庸報』や、自身が発掘した資料である、天津市公署宣伝部が編集発行した中国語機関誌『津津月刊』および『大天津』に含

まれた、作品募集や読者の投稿なども含めた一般の文芸関係記事も分析することにより、一握りの文学者の考えだけではなく、従来の研究では無視されがちな宣伝工作の末端にいる協力者たちの存在を可視化することに挑み、また同時に権力側の宣伝政策や方針と実際行われた宣伝活動の実情を照らし合わせて考察する、先進的な研究の道を切り開いた。

第三の意義は、日中戦争期の華北占領区における宣伝と文学の関係を、長い歴史を持つ日中交流における文学と政治権力という重要なテーマの近現代における焦点として、浮かび上がらせた点である。すなわち、近代化の中で生み出された日本の近代文学の理念と作品が、対中国の宣伝方針における国家観やナショナリズムと交錯しながら、中国人における文学の政治性や思想と衝突したり読み替えられたりする、漢字を共通項とする言語表現のダイナミズムとともに、ジャーナリズムに携わる日中の宣伝や文学の関係者たちが、状況に応じて満州や上海や台湾との間で出入りし移動するという、名目上は中華民国の一部ながら実質的には日本の支配下であった中国大陸占領区が持つ複雑な政治性を、抵抗と協力の二項対立に単純化せずに論じており、今後は異文化間における対外宣伝の矛盾に満ちた「交流」の多面的な実相という、より普遍的な議論へと接続し開かれていくことが期待される。

最終口頭試問及び論文審査委員会では、審査委員より以下の点が指摘された。

第一に、華北占領区における文学テキストの占める位置が全体的に明確に示されていないこと、特に華北文壇の全体像があまり明確に述べられていないことが問題点としてあげられた。第二には、発掘資料の占める位置と有効性に関する議論が十分ではなく、またその取り上げ方が適切であったかどうか、さらに詳細に検討する必要があると指摘された。第三に、第二章から第五章までは時期区分に従って時系列に叙述されている内容が、第六章の作品の分析とうまくつながっていない感じがすること、また第六章では実際に論述された文学作品のテキストの引用が少なく、作品に即した綿密な分析が十分ではないことも指摘された。第四には、宣伝や文学作品がどのように読まれ、受け止められたかという読者の問題がほとんど論じられていないことも不足点としてあげられた。

しかし、これらの課題は、基本的には今後の出版や研究に向けての助言というべきものであり、論述の改善と補強によって対応できる範囲のものと考えられる。

4. 結論

本論文は、日中戦争期の華北占領区における宣伝と文学について、申請者が発掘した行政機関や業界団体による機関誌や記録などの一次資料と、華北占領区で発行された中国語の機関紙や文学雑誌という二種類の資料を主とし、日本電報通信社が発行した中国語宣伝雑誌を補助資料として用いて、その実態と変化を明らかにした、実証性の高い論文である。

本論文は、中国大陸における日本の宣伝活動の実態を明らかにする対外宣伝の研究の一環としても、また中国におけるジャーナリズムの歴史研究としても重要な位置を占めるのみならず、中国文学史および日中文学交流史に関する研究、また政治とプロパガンダと文学の関係について、より普遍的な原理を引き出す研究の進展にも貢献するものである。

審査員一同は、これらの学術的貢献を高く評価し、本論文を博士（ジャーナリズム）の学位を授与するにふさわしいものであると判断する。

2023年2月4日

土屋 礼子
平林 宣和
宗像 和重
李 相哲